

＜投稿論文＞ リマをめぐる新たな社会学的考察にむけて ：都市下層研究のレビューと今後の課題

著者	山脇 千賀子
雑誌名	年報筑波社会学
号	13
ページ	72-95
発行年	2001-10
URL	http://hdl.handle.net/2241/108050

《投稿論文》

リマをめぐる新たな社会学的考察にむけて

——都市下層研究のレビューと今後の課題——

山脇 千賀子

1. はじめに：問題設定

都市下層居住区が都市にとっての大きな社会問題であるという認識は、ラテンアメリカに限ったものではないし、さまざまな時代を通じて論じられている。都市下層居住区には、貧困や衛生や犯罪など社会の負の部分が果食っている、という否定的なイメージが抜きがたく染み付いている。

ただし、ラテンアメリカ諸国における都市化が、国家にとっても深刻な社会問題を引き起こしているというイメージが定着していくのは1960年代以降とすることができよう。ちょうどこの頃、都市人口が農村人口を上回る勢いで増えていることが各国で観察されている。ペルーの場合でいうならば、1940年時点での農村人口は全人口の65%を占めていたのが、1970年代初めには都市人口が過半数を上回るようになり、1990年時点では都市-農村人口比率が1940年時点とは完全に逆転し、都市人口が70%を占めるまでになった。

ペルーにおいて都市は長い間、近代性や文明・進歩といった明るいポジティブなイメージとむすびついていた。植民地時代から十九世紀にかけて欧州諸国をはじめとした外国からの移民によって都市形成が進んだ時期がこのイメージに対応している。それが、1960年代を境にして徐々に、過密な人口集中による環境悪化・深刻な公害や無秩序・不法がはびこる世界、といったネガティブなイメージの方が強くなってきた。こちらは、二十世紀の特に後半を通じてラテンアメリカ諸国における都市化が、多くの場合国内移住によってもたらされているという事実に対応している。つまり、国内の「遅れた地域」から「進んだ」

都市への人口流入が「問題」を引き起こしているという認識に重なる。

こうした都市化の背景には、ラテンアメリカ諸国における社会・経済構造の変化があることは周知の事実であろう。いわゆる伝統的農村社会の解体が二十世紀半ば以降急速に進行したため、農村では生活できなくなった人々が都市へと流出したという説明がされる。

ウォーラステインの世界システム論的な視角からいうならば、ペルーやメキシコを中心とした新大陸は16世紀以降ヨーロッパを介在とした世界規模で展開する経済活動へと包摂される。しかし、だからといってそれ以降、市場経済がすべての人々の生活を支配しつづけているというのは極端な単純化になる。植民地期から二十世紀半ばにいたるまで、多くの先住民の生活を支えてきたのは基本的な生存維持手段である農業を生業とする農村であり、そこには独自の価値観・社会観や生活文化が育まれ続けていた。他方、リマのような植民地都市は、ヨーロッパ帝国主義の出先機関であり、市場経済原理がもつとも先鋭的に現れる社会である。ペルーはこうした異質な社会原理が並存し、交錯する場としての歴史をもっている。もちろん、そこには「平等な並存」など望むべくもない階層構造が存続している。

二十世紀後半以降のリマの都市化は、まさにこうした異なる文化をもつ人々が大量に「ぶつかりあう」現場を映し出している。都市化した先住民を示すチヨロ(cholo)という概念がとりざたされ[Quijano, 1980]、「リマのアンデス化(Andenización de Lima)」という社会変動プロセスに人々は戸惑いを隠さなかった。リマが「南米におけるスペインの小島」としの象徴でありつづけることを望む支配者層インテリが、「かつての古きよきリマをなつかしむ」というタイプのエッセーを数多く残しているのに代表されるように。

現在のリマ都市下層を構成しているのは、こうした都市化プロセスのなかでリマに流入し続ける国内移住者とその子孫が大部分となっている。ここでいう下層とは経済的指標によった区分である。後述するとおり、リマは経済階層によって集住地区がかなり明確に対応する都市になっている。

ペルーのみならずラテンアメリカ諸国の大都市における貧困層集住区は、公有地や私有地を移住者らが不法に占拠することによって形成されている場合が少なくない[幡谷, 1999]。こうした不法占拠によって形成された地域はほと

んど生活インフラが整備されていない。こうした地域をペルーではバリアーダ (barriada) またはプエブロ・ホベン (pueblo joven) と呼んでいる。リマにおいてもっとも古い不法土地占拠によるバリアーダの形成は 1946 年に現在のエル・アグスティーノ区で行なわれた。

こうした現在リマで進行中の社会変動は、これまでペルーが経験したことの無い規模での文化変容プロセスである。また、リマはペルー全人口の三分の一を占める首座都市 (mega-city) であるが、その他の地方においても各々の中心都市への農村からの人口流入とそれに伴う社会変動がパラレルに進行している。こうした都市化現象の帰結の最先端は、ある意味においては国内移住者の集結地であるリマにおける都市下層のなかにこそ見出すことができるといえるだろう。リマの都市下層でおこっている現実注目することによって、リマで(そしてペルーで) 進行中の社会変動を分析するための切り口をいくつか提示するのが本稿の目的である⁽¹⁾。

リマにおける都市下層の分析は、かなり早い時期から多くの研究者が手がけてきているテーマであり、優れた先行研究が少なくない。そうした業績に基づきながら、これまでの研究成果を確認するとともに、今後の研究をどのような方向に進めていくことが重要なのか、いくつかの社会学的な研究成果とその分析視点との関係から論じることにはしたい。論点を先取りするならば、本稿で注目しているのは①ハビトゥスと実践の理論と都市社会研究の接合、②グローバリゼーションとそれにとまなう社会編成の変化である。

2. リマという都市—その概略と 80 年代までの先行研究—

スペインの南米における植民地の中心であったペルー副王領の首都リマは、「太平洋の真珠」と呼ばれるほど、煌びやかな教会建築に彩られた街並みを有する植民都市としての名声を博していた。リマに限らず、スペイン領だったラテンアメリカの都市は共通した特徴をもっている。政庁と大聖堂 (カテドラル) に囲まれた中央広場を基点として、碁盤目状に道路が交差する格子状街路によって街が埋め尽くされる。中央広場という明確な都市の中心が存在する構造を

もっているのだ。

リマの中心部（セントロ）付近には、多くのカトリック教会・修道院・礼拝堂が隣立し、ペルー副王領の名士の大邸宅がある。現在、ユネスコ人類の文化遺産として保存されているこれらの建造物は、リマの重要な観光資源として修復されている。これらの建造物を訪ねてみれば、植民都市リマに集まった巨万の富がいかほどであったのかに想いを馳せることができよう。

19世紀前半にはペルー共和国として独立を果たすが、リマはその首都として現在にいたるまで機能しつづけている。ただし、独立当時は城壁に囲まれ人口も10万人足らずだったリマは、その相貌を中世的都市から近代的都市としてのそれへと変えていく。

1870年代には城壁を取り除く作業が開始され、リマは近代的都市としての新しい特徴を獲得していく。都市の中心地が老朽化・人口密度増加によって環境悪化している状況への打開策として、城壁の外側が新たな都市住民のための住宅地として開発されることになる。従来、城壁の外側は都市部の住民に食糧を供給する後背地であり、ほとんどが農地であった。

都市上・中層むけの住宅地開発の象徴となった現在のアレキパ通りは、1919～30年にわたったアウグスト・レギア大統領政権期に開通し、当時はレギア通りと呼ばれた。旧都市中心部からアレキパ通りを南に下った先には海岸に面したミラ・フローレス区がある。セントロの人々にとっては従来保養地だった海岸沿いのミラ・フローレスやバランコが新たな住宅地となっていく。その手前には、サン・イシドロがあり、これらの地域がセントロに代わる高級住宅街となってきた【地図1参照】。

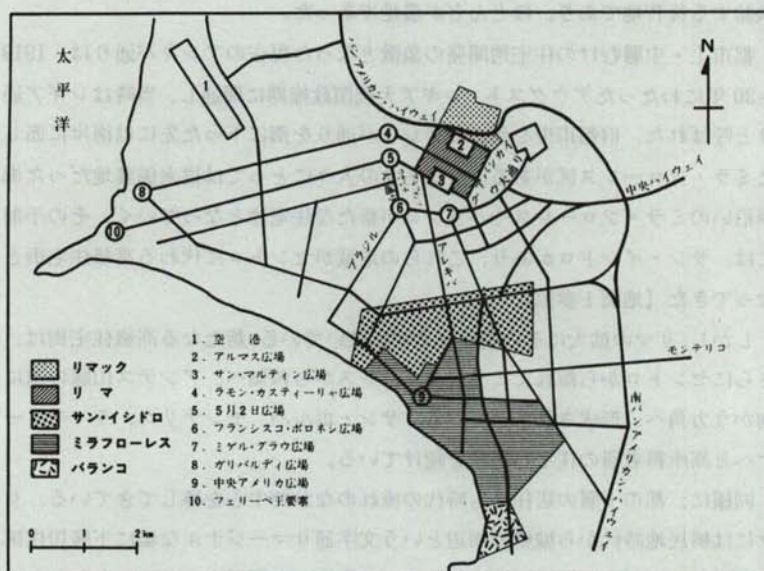
しかし、リマの拡大はその後もしまずに続いている。新たな高級住宅街は、さらにセントロから離れてミラ・フローレスから西側へ、アンデス山脈の頂に向かう方角へ、形成されてきている。サン・ボルハ、モンテリコ、ラ・モリーナへと高所得者層の住宅が移動を続けている。

同様に、都市下層の居住区も時代の流れのなかで中心を移してきている。リマには植民地時代から城壁の周辺という文字通りマージナルな場の下層居住区が形成されてきた。城壁が壊された後、都市中・上層居住区がセントロから遠ざかって行ったのに対し、下層は逆にセントロに居残ることになり中心地のス

ラム化 (tugurización) が進行することになる。

このようにマージナル化したセントロのすぐ東側に隣接しているのが、現在のエル・アグスティーノ区である (ただし、区として成立するのは 1965 年)。同区を中心にして最も古い時期の不法土地占拠による下層居住地域が形成されるが、同地域は東コノと呼ばれている。事情は場所によって様々だが、このような不法占拠によって 1950 年代以降リマの周辺部に多くの下層住民居住区が形成されることになる。現在リマには 3 つのコノ (cono) と呼ばれる下層住民居住地域がリマ都市部を取り囲むようにしてある。それぞれのコノは 4～5 つの行政区によって成り立っているが、形成期の古い順に東コノ・北コノ・南コノの 3 つである【地図 2 参照】。リマ首都圏の現在の人口約 700 万人 (ペルー全国約 2,100 万人) のうち約半数がこの 3 つのコノ居住者によって占められている⁽²⁾。

【地図 1】リマ略図



【出所：[浅香 1991: 152] より】

【地図2】 リマ地区別地図 (1990 年)

【リマ市中心部】

1. バランコ
2. ブレーニャ
3. ヘスス・マリア
4. ラ・ビクトリア
5. リマ (セルカード)
6. リンセ
7. マグダレーナ・デル・マル
8. ミラフローレス
9. プエブロ・リブレ
10. リマック
11. サン・ボルハ
12. サン・イシドロ
13. サン・ルイス
14. サン・ミゲル
15. サンティアゴ・デ・スルコ
16. スルキージョ

【北コノ】

17. カラバイジョ
18. コマス
19. インデペンデンシア
20. プエンテ・ピエドラ
21. サン・マルティン・デ・ポレス

【東コノ】

22. アテ
23. チャクラカージョ
24. エル・アグスティーノ
25. ラ・モリーナ
26. ルリガンチョ
27. サン・ファン・デ・ルリガンチョ

【南コノ】

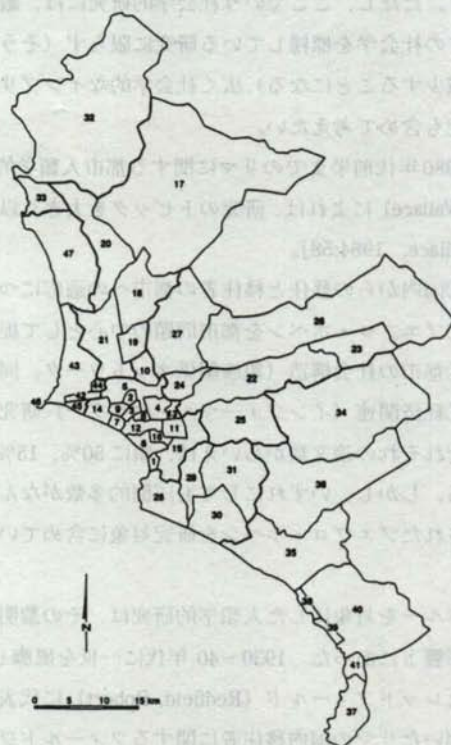
28. チョリージョス
29. サン・ファン・デ・ミラフローレス
30. ビジャ・エル・サルバドール
31. ビジャ・マリア・デ・トリウンフォ

【周辺地域】

32~41 個別名省略

【カジャオ特別区】

42~47 個別名省略



【出所：[Dietz 1998: Lima's Districs in 1999] より作成】

では、以下リマに関する社会学的研究の 1980 年代までの動向を概観しておこう。ただし、ここでいう社会学的研究には、厳密な意味でのディシプリンとしての社会学を標榜している研究に限らず（そうした場合当該先行研究は著しく減少することになる）、広く社会学的なインプリケーションに富んだ他分野の研究も含めて考えたい。

1980年代前半までのリマに関する都市人類学的研究動向を検討したワラス(J. W. Wallace)によれば、研究のトピックを大きく以下の4つに分類できるという[Wallace, 1984:58]。

- ①国内からの移住と移住者の都市への適応について。
- ②プエブロ・ホベンを都市問題の中心として捉える「問題解決志向型」研究。
- ③都市の社会構造（親族関係ネットワーク、同郷者組織など）について。
- ④経済関連（インフォーマル・セクター）研究。

それぞれの論文数からいえば、順に 50%、15%、25%、10%を占める割合となる。しかし、いずれにしても圧倒的多数がなんらかの形で移住者によって形成されたプエブロ・ホベンを研究対象に含めているのが、特徴として指摘できる。

ペルーを対象にした人類学的研究は、その黎明期より英米の人類学者らの強い影響下にあった。1930～40年代に一世を風靡して 60年代まで機軸となっていたレッドフィールド(Redfield, Robert)に代表される都市—農村連続体説に基づいたリマの国内移住者に関するフィールドワークおよび研究は、80年代に至るまで都市人類学的研究の正統派として存続してきたといえよう。最も新しい世代の研究者としてはアルタミラーノ(Altamirano, Teófilo)を挙げることができる。彼は自らのケチュア語話者としての能力を生かし、リマにおける同郷者組織の研究を行い、都市と農村のつながり、都市文化への移民の適応などについての研究を行った[Altamirano, 1984, 1988]⁽³⁾。

こうした研究視点がはらむ問題点は、農村のアンデス文化が都市のプエブロ・ホベンにおいて再現されているというようなアンデス文化を実体化する思考パターンに陥る可能性があることであろう。この思考パターンをとれば、農村ではぐくまれた純粋なアンデス文化に比べて、都市という環境で移住者がはぐくんでいるのは「奇形」のアンデス文化であって劣等なものだという評価に

つながりえない。都市における移住者の文化を、「純粋な意味で」農村にも都市にも帰属しないものと位置づけようとする力が働く背後には、移住者を農村や都市という社会から排除しようとする意思を感じ取ることができる。つまり、社会変動に対する反動ということができる。

移住者にとって、アンデス文化は都市生活を送るうえで役に立つ限りにおいて動員される資源群の一つにすぎないのであって、それを純粋か否かという視点から評価しようとすることは実態とは無関係な文脈をもちこんだ結論先行型思考パターンであろう。都市住民側（ヨーロッパ）がもっている農村（アンデス）への侮蔑的視線と、農村住民側がもっている都市への不信感という歴史的経緯をもつ文脈が持ち込まれている。しかし、特にペルー社会でこの文脈を生きてきた人々にとって、アンデス文化を他のどんな文化とも対等な価値をもつものとして考えて扱うことは大変困難なことに違いない。

米国の研究者ロボによる都市人類学的研究では、都市文化への「資源動員論」的接近が行なわれている [Lobo, 1977]。ロボ [1977] は 1964～74 年の間の断続的な 18 ヶ月間にわたるプエブロ・ホベンで行った参与観察を含む調査に基づく研究である。いわゆるシカゴ学派的視点では、都市化に関するネガティブなイメージ(例えば、「文化の断絶」、「ディスオーガニゼーション」、「周辺化」、「貧困の文化モデル」)が取りざたされていたのに対し、ロボの視点は移住者による都市への適応の積極的かつ明るい側面に注がれている。

ロボは二つのプエブロ・ホベンにおける社会組織、居住パターン、親族関係、価値観に関する調査・分析を行い、以下の結論に達した。①移住者たちは、物質的にも精神的にもコミュニティを形成しているということができる。②故郷に居たときとは異なるけれども積極的な生活目標をもっている。例えば、子どもによりよい教育機会を与えること。都市生活の快適性を追求すること。現金収入の増加などを挙げることができる。③移住者自身のポジティブな自己イメージおよび未来へのイメージをもっている [Lobo, 1977:255-7]。

プエブロ・ホベンへのこうした積極的評価は都市中心部のスラムに対する退廃的イメージと対になっている。都市開発の行政的な思惑からいっても、都市下層の受け皿としてのスラムに未来はないが、周辺部にひろがるプエブロ・ホベンはリマの都市化が進むべき新たな方向性を示していると評価された

[Wallace, 1984:60-63]。未来への希望にみちた移住者たちが、都市におけるインフラ整備の遅れを住民自身の自発的地域活動によって補い、新たな都市生活空間を創造していく、というイメージがプエブロ・ホベンにつけられた。

既述のとおり、不法占拠によって形成されたプエブロ・ホベンでは、上・下水道や電気のような都市生活に不可欠なライフラインを確保することが居住開始当初より重要な課題となる。そのために、有力政治家とのコネが活用されたほか、地域住民運動が盛んになった。また、生命を支える食を家族に確保するために、女性たちが「共同なべ (olla comun)」「民衆食堂 (comedor popular)」とよばれる組織づくりを行なった。こうした社会運動は、いわゆる労働組合などのような古典的な組織化とは異なる「新しい社会運動」として注目をあびたが、その評価についてはさまざまであった。

「新しい社会運動」に関しては、社会学的関心に近い研究としては大別して二つの分野からの分析が行われてきた。一つは、政治学的関心を中心とした研究で、都市下層の「政治的」行動に関して近代的「民主主義」や「市民」概念の枠組みからどのように評価できるかという視点が中心となる研究である。研究傾向をやや乱暴に大別すると、それまでの「権威主義的」政治文化と対比して、都市下層の政治的行動の「民主的性格」を肯定的に評価する研究とこれに懐疑的な研究とに分かれる [村上, 2000]。

もう一つは、ジェンダー視点を組み込んだ社会分析的研究である。新たな社会組織を形成し、それまでになかったコミュニティをつくる過程において、女性が果たす役割の大きさが注目された。マチスモ (machismo) とよばれる男性優位主義が社会原理に組み込まれているペルーにおいて、女性がこうした社会的活動に参加することをとおして、家族関係や男女間の関係性、さらには女性自身の意識などがどのように変化してきたのか、新たな社会形成とのかかわりで議論された⁽¹¹⁾。

こうした研究志向のなかで、刻々と変化する社会現象をともかくも記録することが 80 年代の課題であったといえるかもしれない。移住者によって形成された都市下層の研究として、不法土地占拠者というインフォーマルな存在から、市民というフォーマルな存在に変化していく過程としてその歴史を描写する民族誌的研究が、80 年代に積み重ねられた⁽¹²⁾。その代表格として、Degregori &

Blondet&Lynch [1986] を挙げることができる。

90年代にむけては、Matos Mar [1991] を代表として、多くの研究者らが主張しているように、移住者のアンデス文化の継承度を問題としたり、都市問題として移住者に否定的なレッテルを貼るだけでもない、彼らの生活全体を体系的に把握する必要があるという認識が提唱される。都市下層が主役となり、新たなリマひいては新たなペルーが形成されつつあるという実感が共有されるようになった時期といえようか。

それを裏付けるように、リマの下層居住区の人口比率は急激な増加を続けた。具体的な数字を挙げると、1941年5%、1961年15%、1970年25.6%、1980年32%がリマ全体の人口に占める下層居住区人口割合である〔浅香、1991:166-8,170〕。ただし、下層をどのような指標によって同定するのかという問題はあつた。例えば、1982年リマの住宅の42.6%が不法占拠された土地にあり、その居住者はリマ全人口の47%を占めていたという〔De Soto, 1986:3-14〕。

その後、不法占拠された土地の所有権を獲得する手続きが進められたため、現在ではその居住者人口はずっと減少しているはずだが、社会経済的意味での下層のなかで国内移住者とその子孫が大きな比率を占めることに変わりはない。その多くがエスニックな意味では先住民系であることも、リマという都市社会がどのように編成されているのかを分析する際の大きな問題点である。

3. リマという都市にどのように接近するのか①：

都市住民のハビトゥスと実践

90年代以降のリマに関する研究の方向性を端的に表現するなら、移住者の都市への適応期間が経過して、都市下層の一員として認めたいうでの実態調査が行なわれるようになったことだといえよう。初期の移住者は都市生活の基盤を築きあげ、リマ生まれの二世・三世が成人していくことによって状況も変化している。前述したワラスの先行研究分類でいうならば①、②のタイプの研究は1980年代でその役目を終え、その後は③、④のタイプの研究に比重が移ったといえるだろう。

「伝統的」都市住民とは異なる文化をもつ存在ではあるが、リマを構成する一部である彼らは、一体何を考えどのような行動をとっているのか。新たなリマの実態を明らかにする試みがペルーを代表する社会学者が集まるカトリック大学の研究者を中心に展開してきた。90年代初めにリマ都市下層のメンタリティについての研究調査グループを率いてきた社会学者ポルトカレーロによると、リマの「民衆の心性 (mentalidades populares)」には四つの特徴がある [Portocarrero, 1993]。それぞれの特徴は、いわゆる「伝統的なリマッツィ (limeño tradicional)」の特徴と対比させ場合に際立つ「新しいリマッツィ (nuevo limeño)」のあり方を示している。

第一の特徴は、勤勉性を高く評価すること、および努力をすることへの心構えができていることである。逆に浮き彫りになるのは、リマのスペイン的・貴族的伝統においては「労働」や「勤勉さ」が高く評価されなかった、ということである。機転 (viveza) によって最小限の努力で最大限の利益を獲得することこそが、植民地期からの都市的存在であるクリオーリョ (criollo) の目指した生活スタイルだった⁽⁶⁾。クリオーリョという言葉は都市的先住民を指すチョロという概念と対比的に使われることが多い。

それでは、勤勉性は農村社会起源の性向であって、アンデス文化が都市的環境において再現されているだけかといえ、決してそうとはいえない状況がある。「伝統的」アンデス文化における勤勉性には、対になる相互扶助の精神や再配分原理が付随していた。そうした社会原理によって農村のコミュニティが成立していたのである。しかし、都市において同様のコミュニティは存在しないため、勤勉性が向けられる方向性は個人主義的所有主義になっている。物質的な豊かさを獲得することこそが幸福であり、それを達成するために努力することを厭わない。農村のコミュニティに対する奉仕の精神に相当するものが、都市では個人の発展という価値観に集約されてしまっているという意味で、「勤勉性」のもつ社会的意味は異質なものになっている。

第二の特徴は、いわゆる「魔術的世界」の存続とその影響力の大きさである。近代性の象徴である都市という環境にありながらも、「近代化」によってなくなるはずの「魔術的世界」は逆に活性化される場合すらある。アンデス的伝統に根ざした宗教性や祭りが、リマという西洋の伝統が深く染み込んだ環境において実

踐される。それは、ある意味で都市におけるさめた合理主義や競争主義・成功への狂信的態度への抵抗といえることができる。

もつとも、この抵抗は西洋的伝統を全面的に否定していることを意味しない。むしろ、西洋的伝統を体現するリマのエリート層との対照的でありながら補完的心性の現れとなっている。自らが都市下層民として他の階層の人々とは異なる存在であることを主張することによって、リマという都市社会における自らのニッチを確認することができる、と言ったらよいだろうか。人種的・身体的特徴、教育レベル、財産の多寡といった現実の社会的差異を正当化するために、「魔術的世界」は下層の人々に欠かせない支えとなっている。

第三の特徴は、第二の特徴と重なり合うが、自らが社会・文化的に特異な集団に属しているという感覚をもっていることである。政治的・文化的に支配されているという感覚が内面化されており、それは自己評価の低さにつながる。これを克服するために極端な上昇志向をもつことと、エリート層に対する恨みをもつことは、しばしば一個人のうちにも共存しうる両義的心性といえよう。まさに、他者から押し付けられるイメージと自己イメージの相互作用の産物といえるかもしれない。

第四の特徴は、親族の重要性の高さである。移住者たちの間では同郷者同士のつながりも強いことが強調されるが、重要性のうえでは親族よりはやや低いという。さらに、近隣に住む地縁も、おそらく中間層やエリート層居住区に比べれば相対的に重要な意味をもっている。親族の重要性が高いという特徴は、第一の特徴とむすびついており、個人をとりまく最も小さい規模の集団としての家族または世帯を単位として物質的な豊かさを追求することが下層の人々にとっての最優先課題になっている。

以上ポルトカレロによって分析された「新たなリマっ子」たちのメンタリティは、都市下層の生活全体を視野にいらただけでなく、リマにおける他の社会階層との相互作用によって形成されつつあるリマという都市の全体像を視野にいられた総合的アプローチによって導き出されているという点で画期的な都市社会学的業績となっている。

同様に、リマへの国内移住者に関する総合的視点から行なわれた優れた研究業績として、Golte & Adams [1987] を挙げることができる。同書では、ペルー各

地の地理的・社会経済的にも異なる特徴をもつ地域別に出身地を12選出し、それぞれの地域出身者がリマにおいてどのような職業についているのか、適応状況はどうか、について調査・分析している。例えば、リマでの特定の職業への集積が顕著にみられる同郷者グループに関しては、なぜその職業なのかという疑問に対して、出身地や移住者の特徴だけから分析するのではなく、例えば同郷者間のネットワークがどのように機能したのか、というようなリマという場における人々の相互作用にも注目したアプローチをとっている。移住者の出身地における文化を実体化した静態的な分析に陥らず、都市における「生き残り戦略」がどのように選択されたのかを丹念に追及することによって動態的な視点を生かした研究になっている点が評価できる。

このように、同郷者グループがもっている文化的な特徴と、リマという職業マーケットの特徴の両面からアプローチする方法は、ヘクターの「文化的分業」(cultural division of labor) という考え方と類似している [Hechter, 1978]。ヘクターは米国の例を挙げて、特定のエスニック・グループに対応した職業分布が、人種や民族性に単純にむすびつけられるものではなく、集団や社会のヒエラルヒーと階層化の問題を考慮するべきであることを論証しようとした。異質な文化をもつ集団によって構成される社会において、文化的分業がどのように形成されるのか、それぞれの社会の文脈に応じた分析が必要だとヘクターは主張している。米国の場合では国際的な移住者の流入による多文化共存社会の現実をどう捉えるのが問題になっているが、リマの場合は国内移住者がリマを新たな多文化状況に導いたことによって新たな社会が形成されつつある現実へのアプローチだという意味で類似性と異質性をもっている。

ここで紹介したリマに関する二つの研究は、いずれもリマという都市がいかに異質なもの同士を会わせ場となっているのかを浮き彫りにして、多文化が並存しながらひとつの社会をつくりだし続ける現場を分析している。ただし、リマがこうしたハイブリッドな性質を獲得したのは、20世紀後半に引き起こされた急激な膨張期間から遥かにさかのぼったスペイン植民地の首都としてリマが建設されて以降の継続的プロセスのなかであろう。スペイン社会の単なるレプリカではありえない新大陸における新たな社会・文化の創造が行なわれた植民地都市は、白人＝スペイン人、黒人＝アフリカ系奴隷さらには先住民との混血的文化を

はぐくんできた土壌をもっている。

もっとも、混血的文化は植民者としての白人を頂点とした人種主義的な階層的
社会秩序を完全に消滅させたわけではない。リマに生きる人々は、自らの混血度
／純血度や文化が直接的に自らの社会的地位へと変換されることを 21 世紀とな
った現在にいたるまで実感し続けている。前述の二つの研究は、1980 年代から
90 年代にかけてのリマにおけるこの変換の過程を描写しているということもで
きる。

このような文化と社会的不平等の関係性というテーマへの関心を共有してい
る社会学的アプローチとしては、文化的再生産論（宮島 [1994]）がある。「文化
的再生産論の観点からは、ある集団の客観的社会的条件が（時間的経過も含んで）ど
のように文化的な条件に変換され、さらにそれが社会的な有利－不利に変換され
るかという過程に関心をもつ。あるいは、その集団の原初的文化特性が、それら
が位置する特定の文化市場との関連でどのような社会・経済的有利－不利へと変
換されるか、という側面に関心をもつといつてよい」[宮島, 1994:171]。

文化的再生産論の代表的業績は、フランスにおける社会階級の再生産と社会関
係資本・文化資本の関連性についての詳細な分析を行なったブルデュー
（Bourdieu, Pierre）の『ディスタンクシオン』であるが、エスニシティ研究にお
ける明示的な活用は決して多くなかったという [宮島, 1994:170-1]。リマに関
して文化的再生産論的アプローチを行なうのであれば、社会階級とエスニシティ
は切り離し難くむすびついたカテゴリーであり、そうした観点から社会関係資本
と文化資本をどのように析出して社会構造的問題とむすびつけていくことがで
きるのかが大きな課題となろう¹⁷⁾。

そうした視点からみて、文化的再生産論と類似したアプローチをとっている重
要な先行研究としては、ルイス（Lewis, Oscar）の「貧困の文化（Culture of
Poverty）」論を挙げることができるだろう [Lewis, 1959, 1961, 1965=1970]。ル
イスは、メキシコ、プエルトリコ、ニューヨークのラテン系住民のスラムにおけ
る調査を通じて、貧しい人々の間には一定の構造原理をもち世代間で継承される
ような「貧困の文化」と呼び得るサブカルチャーが存在すると主張した。「貧困
の文化」論はその通文化的な妥当性などについて多くの議論を呼んだが、本稿の
視点から重要なのは、貧困層・都市下層居住区の住民という社会的地位に特定の

文化を対応させた分析視点をルイスがもっていたことである。

貧困は特定の人種・民族集団の問題ではないし、物理的貧困自体を根絶することが必ずしも生活様式全体である貧困の文化を根絶しない、というルイスの主張は、文化的再生産論の分析視角を共有しているようにみえる [Lewis, 1965=1970:42]。あるいは「貧困の文化」をブルデューのハビトゥスと実践の概念で書き換えることが可能かもしれない。あえて単純化するというなら、「貧困の文化」論はいわゆる貧困層にだけ注目した議論なのだが、その他の社会的カテゴリー（例えば、階級、ジェンダー、エスニシティ等）に関しても、貧困層の場合と同じようにそれぞれのサブカルチャーを想定できると考えるのが文化的再生産論となるのではないだろうか。

都市下層や国内移住者に焦点をあてて文化再生産論的分析が既に行なわれていることは前述の二つの研究でみたとおりだが、リマという都市全体への接近法という意味では、その他の社会的カテゴリーに対応するハビトゥスと実践に関する調査・研究を進めることによって、より構造論的かつ動態的分析が可能になるだろう。もっとも、巨大都市リマ全体を把握するためには、1960年代から80年代にかけてプエブロ・ホペンの研究に注がれたのと同じ程度の関心が、その他のリマを構成する部分社会へも向けられなければならないかもしれない。

そうした意味で戦略的に注目すべきなのは、グローバリゼーションという現象ではないだろうか。リマにおいてすべての部分社会を巻き込んで包括的に進行しているグローバリゼーションが及ぼしている社会的な影響に注目することは、都市下層に偏った関心を平準化することができるという戦略的有效性をもつ。そして、近年急速に進むグローバリゼーションに関しては、それがどのような社会編成上の作用をもたらしているのか、早急な究明が求められているのが現状といえる。グローバリゼーションにともなうハビトゥスと実践の変化に注目するアプローチが、リマ都市社会研究の新たな局面をもたらす可能性があるのではないか。

4. リマという都市にどのように接近するのか②：

グローバリゼーション研究

90年代以降のリマという都市において特に注目をひく現象のひとつは、大型ショッピングモールの登場とその人気である。モールにはスーパーマーケットやデパートのほかにカフェテリアやファーストフード店といった飲食店や各種専門店が立ち並ぶ。さらには映画館（ハリウッド映画が上映の大部分を占める）やボリング場などのレジャー施設や各種ショーを行なう舞台なども併設されているモールもある。日本でも話題を呼び各地で建設されてきているような、いわゆる米国型モデルにそったつくりとなっている。こうしたモールにおける消費行動は、ペルーに特有のものというよりはグローバルに共通のパターンとなる。マクドナルド・ハンバーガー店に代表されるグローバルに展開するフランチャイズ・チェーン店における定式化されたマナーに則った消費行動は、日本でもペルーでも米国でも変わらない。

ただし、こうしたモールにすべての階層の人々が均等に出入りしているわけではない。多くの都市下層の人々にとっては、モールの商品やサービスの価格基準は高すぎる。近所の公設市場や個人商店での買い物でさえ切り詰めた生活をする人々にとっては近寄りがたい場所ということができよう。もっとも、若い世代にとっては流行の最先端であるモールを実験するという誘惑の力によって、心理的な障壁は比較的容易に飛び越えられるものになっているようだ。

このように消費スタイルのグローバル化が進むだけでなく、対になる労働についてもグローバル化が進んでいる。国外で生活しているペルー人は、1980年時点における約50万人から1994年には148万人に急増したと推計される[Altamirano, 1996:171]。その多くはペルー国内の労働市場では適当な職を得ることができないため外国へ活路を求めた人々である。この他にも、外国生活を経験してペルーに戻ったという人々を含めて考えれば、推計以上の人々が外国での労働を経験していることになる。ペルー全体の人口比率では国外生活者は約7%になるが、リマ出身者に占める割合で考えた場合この比率はずっと高くなることが予想される。リマで出会う人のなかで、友人や親戚のなかに外国生活をしている人が全くいないというケースの方が珍しいのが現状である。それだけに、ペルーだけが自分の生活や労働の場とは考えていない人々が増えていく傾向にある。グローバルに労働の場を選択できるという意識が普及しているといえようか。

こうしたグローバルな消費スタイルをもち、広く世界が自分の生活する場だと

いう意識をもつ人々は、近年まではごく限られたエリート層のコスモポリタンであった。ペルーは16世紀以降世界各地の移民を受け入れ続けてきた新大陸の国の一つだが、特に1980年代以降は移民送り出し国の一つに数えられるほどに変化してしまった。もはや国外へ生活の活路を見出そうとする人々は高学歴・高所得者層に限られず、あらゆる社会階層に共通の傾向として定着している。実際に、在外ペルー領事館に選挙人登録をしている人々の学歴データを分析してみると、ペルー全体の平均修学レベルとほとんど変わらないことが分かる [Altamirano, 1992:77-79]。それだけ、あらゆる階層の人々が外国に出ていることを示している⁽⁸⁾。リマへと国内各地からの移住者が流れ込むのと同時に、リマからは米国を中心として世界各地に何かを求めて人々が流出していく構造が浮かび上がる。

また、物理的な移動を伴わずに世界を駆け巡ることができる情報空間を提供するインターネット・カフェを、リマのあらゆる街角で見かけることが珍しくなくなったのも90年代後半以降のことだ。いわゆる都市下層居住区においてもインターネット・カフェは身近なものとなっている。1998年の推計によれば、ペルーのインターネット・アクセス人口は25万人を越えており、世界平均からみてもかなり高い増加率で増えつづけている [Manrique, 1999:232]。インターネットに限らず、テレビ、ビデオなどのメディアを通じて、リマに居ながらにして欧米諸国の文化や生活スタイルを身近なものに感じる人々が急速に拡大している。

以上で簡単に現状を概観しただけでも、今やリマの社会変動を語るのにグローバルゼーションというキーワードは不可欠なものとなっていることは明らかであろう。現地の社会学者たちもこうした視点からの業績を世に問い始めている [Degregori & Portocarrero 1999, Grompone 1999]。しかし、より包括的に都市とグローバルゼーションの関係性に注目した議論を展開しているのは世界都市論であろう。

世界都市 (world city/global city) といった場合、多くの人々はいわゆる先進国の中枢的都市 (例えばニューヨーク、ロンドン、東京等) が経済的にも社会・文化的にも超国家的性質をもつようになったことを取りざたしているというイメージをもつかもしれない。しかし、「世界都市論の課題は、世界中枢都市を頂点とし、第三世界の都市をも巻き込んで展開している都市ヒエラルヒーの構造をとらえることにある」 [伊豫谷, 1993: 62]。つまり、中枢都市の世界化の背景と

してのみ見なされがちな第三世界の都市問題も、同じひとつのシステム内で相互に関連しあいながら起こっていることとして把握すべきことが提唱されている。実際のところ、世界レベルでの労働力移動の加速化と大衆消費社会型の消費パターンのグローバルな普及によって、世界に生きる個々の人々の生活スタイルを分析するなら、「第一世界のなかに『第三世界』が形成され、第三世界のなかに『第一世界』ができている」ということさえできる現状がある。[伊豫谷, 2001:17]。

ペルー国内で都市へと向かう人々、さらにはペルーを離れて外国へと向かう人々の流れは、グローバリゼーションによって引き起こされている社会の再編過程の一部である。リマにみられる国内移住による急激な都市化は、多くの第三世界諸国でもみられ、欧米の歴史的経験との対比から「産業化なき都市化」とよばれた。しかし、第三世界において 20 世紀後半を通じて進行した都市化は、世界経済システムの変化に対応した独自の発展を遂げることは当然の帰結というべきだろう。いわゆる近代世界を支えてきたグローバル性とは異質なグローバリゼーションが進行してきたことの証ということもできる。「グローバリゼーションは、近代化によってつくられてきた時空間の組み替えあるいは解体であり、さらに言えば、近代を特徴づけてきた領域性の崩壊を意味する」[伊豫谷, 2001:4]。

そもそもリマの都市的な発展の背景には、植民地時代からのグローバルとローカルのせめぎあいがあった。南アメリカ大陸というローカルな場に、ヨーロッパ起源のグローバルな文明を普及させるための牙城として位置づけられたのが植民地都市リマだった。あえて単純化するなら、カトリック教勢力と植民地政府を頂点とした社会構造が、現地の先住民的文化や社会構造とどのように折り合ってきたのか、という過程が世界システム論的な意味での近代化のながれということもできよう。

もっとも、グローバルなヨーロッパ文明とローカルな先住民文化の対抗図式だけでは取りこぼされてしまう要素も少なくない。前節でも述べたとおり、リマにはヨーロッパ人だけではなくアフリカ出身の多くの人々が奴隷として定住し、先住民との間で、「アメリカ的」ハイブリッドな文化を形成してきた。こうした混血的文化を基盤にして、スペインからの独立以降ペルーは近代国民国家としての社会再編成を進めることになる⁽⁹⁾。

これに対して、現代ペルー社会で起こっているグローバルな労働市場・消費スタイルの普及とローカルな価値観・生活様式とのせめぎあいが、どのような特徴をもつのか。この流れのなかでペルー社会はどのような変化を経験することになるのか。経済的には市場メカニズムが歪められないよう政府の介入をできるだけ小さくするという新自由主義的考え方が90年代以降の主流となり、政治的にも選挙で選ばれた政権が統治する民主的政体が確立されてきた。政治・経済的な意味での、いわゆる「グローバル・スタンダード」に則った社会づくりが進められるなかで、人々の生活はどんどんナショナルな枠組みを越えた特徴を示し始めている（例えば、消費パターン）。それを情報環境のグローバル化が加速させる状況をつくっている。

では、実際のところ、リマにおいてどのような社会再編の動きがあるのか。リマの都市下層に注目した筆者自身の調査の過程で浮かび上がってきたグローバリゼーションと社会編成の変化の関連性について一例を挙げてみよう。

既に述べたように、リマは社会階層と居住地区が密接に対応した都市となっている。つまり、リマの空間的秩序は社会的秩序に対応してきた。均質的な住民同士が空間的な凝縮性を持ち、たとえ空間的に隣接して居住していても異なる社会・経済的特徴をもつ住民同士は社会的に分断された存在である。リマという都市内での住み分けが、一種の社会秩序を形成していることが、リマに生活する人々のメンタル・マップ調査などからも明らかにされている [González Cueva, 1993]。

ところが、グローバリゼーションはこうした社会原理とは異なる論理を、人々の社会的なつながりの場に持ち込んだ。インターネットを通じて、それまでは出会う可能性の少ない社会・経済的に異質な人同士のコミュニケーションの可能性が拡大したことはよく指摘される。さらに、国際的援助団体が都市下層居住区における開発プロジェクトに参画することによって、先進国出身の比較的高学歴な人々が都市下層の人々と直接的な関わりをもつ機会が増えている。ややもすれば、ミドルクラスの人々よりもずっと国際的なネットワークをもつ都市下層の人々もある。そして、彼らと外国人をむすびつけるメディアとしてインターネットを通じたコミュニケーションの持続は重要な機能を果たしている。

従来、外国人と都市下層はリマにおける活動空間を共有しないのが一般的であ

ったことを考慮するならば、グローバリゼーションは都市の従来型秩序を攪乱している。それまでの空間的距離と社会的距離の間にあった秩序がくずれつつある現場といえようか。社会的距離はこの場合、インターネットを活用できるかどうか、開発プロジェクトへの関心を共有しているのか否か、といったことが基準となって形成され、それは空間的距離に反映されるとは限らない。コンピュータ・リテラシーや開発プロジェクトを支えている思想的バックグラウンドを共有することは、都市下層の人々にとって自らの生活向上に密接にむすびついた問題であるだけに、熱心に学習せざるをえないともいえる。それだけ、グローバリゼーションがもたらす社会変動の先端部分にさらされている。

もちろん、グローバリゼーションに直面しているのは都市下層だけではない。エリート層はもともとコスモポリタンとしてグローバルな消費・労働市場の動きに敏感に対応してきた人々である。そうした意味において、ペルーにおける社会階層の両極化によるミドルクラスの大幅な減少が進む現状は、グローバリゼーションがもたらしている新たな社会秩序に基づいた社会再編のプロセスを映し出しているようにみえる。

それでは、具体的にどのような新しい「社会」が生まれようとしているのか。グローバリゼーションがもたらす多様な社会的作用とリマという都市社会の反応は、どのような特徴をもつのか。その分析にどのようなアプローチが有効なのか。それこそが、私たちの前につきつけられている課題である。

5. おわりに

リマという植民地都市が誕生した経緯そのものがグローバリゼーションの帰結であるわけだが、そこでグローバリゼーションの流れが止まったわけではない。16世紀以来の大きなグローバリゼーションの第二波は19世紀前半の独立とそれに続く国民国家形成期にやってきた。さらに、第三波が21世紀に入った現在もその流れのなかにある20世紀後半以降の世界経済の成立とそれにとまなう社会のあらゆる側面のグローバル化なのではないだろうか。これらの波は、すぐに沖に引いていくわけではない。リマという都市は、こうして打ち寄せる波にじんわ

りと覆い尽くされ、波の爪あとは消えずに積み重なっていく。

本稿では、この波の爪あとを人々の生活スタイル—ハビトゥスと実践—に見出し、都市社会の構造との関連性をさぐるアプローチを提唱している。最近では、ペルー全国を対象にしたマーケティング調査手法を基本にしたライフスタイル研究も行なわれるようになり [Arellano, 2000]、同アプローチを実践する地盤は整ってきているように思われる。これから、筆者も波の一角を占める外国人研究者のひとりとして、爪あとをつけながら爪あとを辿る作業をしていくことになるだろう。

〈注〉

- (1) 筆者は 2000 年 8 月にリマのエル・アグスティーノ区において、都市下層住民のライフスタイル研究のため一般家庭での住み込みによる参与観察および調査票をつかった面接調査を行なった。同調査で収集したデータの詳細な分析は、現在別稿を準備中である。なお、同調査は、トヨタ財団による 1999 年度研究助成 B「ラテンアメリカにおける民主的な政治社会の構築に向けた制度的基盤に関する調査研究—ペルーの低所得者層による自助を目的とした社会組織の事例から—」（研究代表者：地域研究企画交流センター教授 山田睦男）を受けて行なわれ、本稿はその研究成果の一部である。
- (2) ただし、コノ居住者すべてが経済的指標によって下層に位置づけられるとは限らない。特に居住歴の古い人々のなかにはミドルクラスの生活レベルを達成している者も少なくない。このような経済レベルが多様な住民を抱えた都市下層居住区の実在は、ラテンアメリカ諸国において決して珍しくない。
- (3) アルタミラーノはその後、フィールドを国内から国外へ拡大した移住者研究へと展開している。米国、ヨーロッパ諸国、日本、豪州において、ペルー人移住者がどのような社会組織を形成しているのか、母国とのつながりはどうなっているのか、移住者のアイデンティティはどうなっているのか、等のテーマに取り組んでいる [Altamirano, 1990, 1992, 1996]。彼の研究動向は、現実のペルー社会における関心動向に対応しており、そのこと自体がペルーにおける文化状況を反映しているようで興味深い。
- (4) 1975 年にメキシコで開催された世界女性会議はラテンアメリカにおけるジェンダー研究の発展に大きな影響を与えた。その後も、国連の活動がラテンアメリカにおける研究動向と密接にむすびついている。「貧困の女性化」、「女性のエンパワーメント」といった視点が国連機関によって提唱されるのと、関連した研究があらわれるのは、ほぼ同時とい

ってもよいだろう。実践的な世界レベルでの開発戦略と研究が密接にむすびついている点がラテンアメリカの特徴であり、こうした事態こそがグローバリゼーションの側面といえることができるだろう。

- (5) リマ都市下層に関する 1980 年代以降の先行研究の詳しいレビューについては、主に政治学的関心から分析されたものではあるが、村上 [2000] がまとめた整理になっている。
- (6) クリオリーヨとは、本来は植民地生まれのスペイン人を指す。しかし、ペルーでは徐々にエスニックな意味とは切り離された文化的な意味合いをもつ言葉として使用されることが多い。使用法は大きく二つに分類できる。一つは、都市に居住する人々の振る舞いや性向を形容する場合に使う。具体的には、悪賢く抜け目がない、急ごしらえで間に合わせの問題解決をする、責任感がなく時間や約束を守らない、陽気で詩歌や言葉の才に富む、といった特徴である。二つ目は、アンデス文化と対比的に都市部の「混血的」文化を形容する場合に使う。特に、アフリカ系住民の文化的影響が強い音楽、料理、踊りなどの形容詞となることが多い。また、クリオリーヨという概念をペルーのナショナル・アイデンティティの核として提唱する動きもあった。詳しくは、イナミネ・山脇 [1995] を参照されたい。
- (7) この課題に取り組んできている先達としては、宮島 [1999] がある。
- (8) ペルーにおけるすべての社会階層の人々が世界の労働市場に進出していることと、出身国における社会階層と受け入れ国におけるそれが対応しているかどうかという点は区別して考えなければならない。例えば、ペルーにおいてミドルクラスのホワイトカラー層だった人が、日本では言葉の壁に阻まれてブルーカラー層の仕事にしかつけないということは決して珍らしいことではない。逆に、ペルーでは民族音楽演奏家としての活動はあまり高い社会的評価とはむすびつかないが、先進諸国においてはアーティストとして比較的恵まれた処遇をされる場合がある。移動する人々の属性は、世界市場の評価に基づいて再階層化される。
- (9) 共和国制下のペルーにおいて、近代国民国家としての社会の再編成がどのようなかたちで進んだのかという論点に関しては、ペルーでも歴史社会学的研究が蓄積されており、近年は若干研究者の詳細な歴史資料に基づいた比較的小さなテーマの研究が目立つが、それらの先達的でより包括的な業績としては、Cotler [1978]、Stein [1980]、Flores Galindo [1988] などを挙げることができる。19 世紀後半から 20 世紀前半にかけて、リマで結成されたさまざまな社会組織の特徴を新たな社会編成とのかかわりから分析した日本語業績としては、山脇 [2000] がある。

〈文献〉

- Altamirano, Teófilo 1984 *Presencia Andina en Lima Metropolitana*, Pontificia Universidad Católica del Perú.
- 1988 *Cultura Andina y Pobreza Urbana*, Pontificia Universidad Católica del Perú.
- 1990 *Los que se fueron-Peruanos en Estados Unidos*, Pontificia Universidad Católica del Perú.
- 1992 *Exodo-Peruanos en el exterior*, Pontificia Universidad Católica del Perú.
- 1996 *Migración-El fenómeno del siglo*, Pontificia Universidad Católica del Perú.
- Arellano Cueva, Rolando 2000 *Los estilos de vida en el Perú*, Consumidores & Mercados (Perú).
- 浅香幸枝 1991 「リマ 副王たちの都から混沌の都へ」 国本伊代・乗浩子(eds.)『ラテンアメリカ 都市と社会』新評論：151-172。
- Bourdieu, Pierre 1979 *La Distinction-Critique Sociale du Jugement*, Editions de Minuit. = 1990 石井洋二郎訳『ディスタクシオンⅠ, Ⅱ』藤原書店。
- Cotler, Julio 1978 *Clases, estado y nación en el Perú*, IEP.
- Degregori, Carlos Ivan & Cecilia Blondet & Nicolas Lynch 1986 *Conquistadores de un Nuevo Mundo-De invasores a ciudadanos en San Martin de Porres*, IEP.
- Degregori, Carlos Ivan & Gonzalo Portocarrero (eds.) 1999 *Cultura y Globalización*, Red para el Desarrollo de las Ciencias Sociales en el Perú.
- De Soto, Hernando 1986 *El otro sendero: la revolución informal*, Lima, Editorial El Barranco.
- Flores Galindo, Alberto 1988 *Buscando un inca*, Ed. Horizonte.
- Golte, Jurgen & Norma Adams 1987 *Los Caballos de Troya de los Invasores*, IEP.
- Gonzalez Cueva, Eduardo 1994 *Ciudades Paralelas - Imaginarios urbanos en Lima*, Tesis de Bachiller en Sociología de La Pontificia Universidad Católica del Perú.
- Grompone, Romeo 1999 *Las Nuevas Reglas de Juego-Transformaciones sociales, culturales y políticas en Lima*, IEP.
- 橋谷則子 1999 『ラテンアメリカの都市化と住民組織』古今書院。
- Hechter, Michael 1978 "Group Formation and the Cultural Division of Labor," *American Journal of Sociology*, 84-2:293-318.
- イナミネ・ハルオ・フアン・山脇千賀子 1996 「ペルー人とは何か」 中川文雄・三田千代子(eds.)『ラテンアメリカ 人と社会』明石書店：57-84。
- 伊豫谷登士翁 1993 『変貌する世界都市』有斐閣。
- 2001 『グローバリゼーションと移民』有信堂高文社。

- Lewis, Oscar 1959 *Five families- Mexican studies in the Culture of Poverty*, New York, Basic Books.
- 1961 *Children of Sanchez*, New York, Random House.
- 1965 *La Vida- A Puerto Rican Family in the Culture of Poverty-San Juan & New York*, New York, Random House. = 1970 行方昭夫・上島健吉訳『ラ・ビーダ I』みすず書房。
- Lobo, Susan B. 1984 *Tengo casa propia - Organización social en las barriadas de Lima*, Lima, IEP-Instituto Indigenista Interamericano.
- Manrique, Nelson 1999 "Los Andes a las puertas del Nuevo milenio-El Perú y la sociedad de la información," Degregori, Carlos Ivan & Gonzalo Portocarrero (eds.) 1999 *Cultura y Globalización*, Red para el Desarrollo de las Ciencias Sociales en el Perú.
- 町村敬志 1996 「グローバル化の都市的帰結—移動者視点から見た都市」『岩波講座現代社会学第18巻 都市と都市化の社会学』岩波書店：189-211。
- 1999 『越境者たちのロスアンジェルス』平凡社。
- Matos Mar, José 1991 "El nuevo rostro de la cultura urbana del Perú," *América Indígena*, 51-2&3:11-34.
- 宮島喬 1994 「文化的再生産の社会学」藤原書店。
- 1999 「文化と不平等」有斐閣。
- 村上勇介 1999 「ペルーにおける下層民と政治—1980年代以降の研究の特徴と今後の展開に向けての課題」、『地域研究論集』Vol.2 No.1:141-179。
- Portocarrero, Gonzalo 1993 "Ajuste de cuentas: cuatro años de TEMPO," *TEMPO Los Nuevos Limeños*, Tafos-SUR.
- Quijano, Anibal 1980 *Cultura y dominación, lo cholo y el conflicto cultural en el Perú*, Mosca Azul Editores.
- Stein, Steve 1980 *Populism in Peru*, The University of Wisconsin Press.
- 山脇千賀子 2000 「リマにおける新たな『社会』の胎動—社会組織・ソシアビリティ・エスニックグループ」『筑波大学地域研究』No.18: 87-105。

(やまわき ちかこ／文教大学)